

学生海外調査研究	
ロンドン大学学会 Spectres of World Literature と世界文学の現状	
	松浦 恵美
	比較社会文化学専攻
期間	2011年9月6日～2011年9月17日
場所	イギリス（ロンドン）
施設	ロンドン大学、School of Advanced Study

内容報告

1. 本調査研究の必要性と目的

現在世界各国における文学研究のあり方は大きな変化を迎えている。19世紀以降の文学研究では、ヨーロッパ・北米を中心とする西洋の文学テキストに特権的な地位が与えられていた。しかし現在では、アジア、アフリカ、オセアニア、ラテンアメリカなど世界各地域から発信される文学テキストに注意が払われ、研究対象としても批評の生産の場としても重要な位置を占めるようになってきている。21世紀に入ってますます加速するグローバリゼーションと相まって、「西洋文学」から「世界文学」への変化は現在の決定的な潮流となっている。それに伴い、従来の西洋中心の文学研究を脱して、「世界」で起こっている文学を取り巻く現象を論じるための批評理論および実践が求められるようになってきている。

日本における英米文学研究は、これまで主に本国の研究をなぞる形で進められてきたといえる。現在に至るまで、日本における文学研究には西洋の理論を輸入しそれを正確に使う西洋のテキストを読むという基本的傾向があったことは否定できない。このような姿勢は、これまでも問題視されてきたものであるが、今後さらに厳しく問い直されるべきものである。西洋以外の地域からの文学研究では、ガヤトリ・スピヴァクやホミ・K・バーバ、レイ・チョウなど、アジア出身の文学者が顕著な成果を表している。今後日本から文学研究を行うに当たって、どのような姿勢が取られるべきか、そして何がなされるのかを考えるのは必要なことである。

報告者は、19世紀から20世紀初頭のアメリカの小説家ヘンリー・ジェイムズの研究を行っている。今後の世界文学において、ジェイムズについての研究は相反する二つの側面を同時に示すであろうと考えられる。第一に、ジェイムズは近代におけるコスモポリタンな作家の代表的人物である。彼は創作活動を始めた1870年代にヨーロッパにわたり、主にイギリスに滞在して大西洋の両岸の文化と人物を描いた。アメリカとヨーロッパの両方の文化を比較しながら描き、そしてどちらかに絶対視するのではなく根なし草の立場をとり続けた。この点において、ジェイムズは比較文学の先達をつけた作家だと言える。また、常に二つの文化の邂逅から生まれるものを描くと言う意味でも、ジェイムズは従来の国民文学では捉えきれない、トランスナショナルな作家である。一方で、ジェイムズを受容のされ方には西洋中心主義の影響が付きまとっている。ジェイムズは西洋文学のキャノンの一人とされる作家である。そのため、西洋以外の地域からジェイムズ研究を行うことには、必然的に西洋中心主義の問題と向かい合うことが伴われる。これまでの日本におけるジェイムズ研究を見ると、日本という視点を生かしたジェイムズ研究は稀であり、また日本と西洋との間の非対称性という問題は透明なままにされてきた。今後のジェイムズ研究には、むしろ非西洋からの視点を生かしたこれまでとは異なるアプローチが積極的に求められるところである。

今回の海外調査研究では、ロンドン大学の School of Advanced Study で行われた学会 Spectres of World Literature に参加した。今回の学会では、イギリスを中心としつつ、UAE、バングラデシュ、日本、ポルトガル、ルーマニア、スロバキア、フランス、ドイツ、イスラエル、アメリカ、カナダなど、アジア、ヨーロッパおよび北米地域からの発表者が、現在起こっている新しい「世界文学」という現象について発表を行った。いずれも現在進行中の文学をめぐる新しい状況について、そしてそこに内在する可能性と危険性について深く切り込んだ内容であり、今後の文学研究において求められる姿勢を考える上で示唆に富むものであった。

2. 調査内容

今回の学会の発表内容は、大きく二つの傾向に分けることができる。一つは現在進行している「世界文学」という現象を理論的に分析するものである。もう一つは、欧米に限らずアジア、アフリカやラテンアメリカなど非英語圏の地域の文学を個別に分析したものである。以下それぞれの内容について紹介したい。

2.1 「世界文学」—マルクス主義、ポスト植民地主義、ポスト冷戦とグローバリゼーション

まずは、「世界文学」そのものについて、その言葉により表わされる現在の文学をめぐる状況がどのようなものなのかを理論的に考察する発表について紹介する。「世界文学」とはそもそも1827年にゲーテが作り出した概念である。国民国家の成立とともに確立されていった国民文学と対比して、ゲーテのいう「世界文学」は、一国家を超えたより広い射程範囲を持ち、異文化との交流とそれにより生じるテキストの流通を介する文学のあり方を予期するものであった。しかしその後の19世紀の「世界文学」は、実際にはヨーロッパの帝国主義と植民地主義を背景として、ヨーロッパの文学を中心とした「西洋文学」に留まるものであった。しかし、20世紀中盤以降、ラテンアメリカやアジア、アフリカなどヨーロッパ以外の地域における文学が注目を集め、さらにグローバル化が進む現代においては、ついに世界全体を舞台とする「世界文学」が実現しつつあるように見える。しかし、「世界文学」の名で呼ばれる現在の文学的現象は、様々な政治的、経済的そして歴史的要因により決定されている。この新しい状況を精緻に読み解き言説化することが、世界文学の研究においてまず求められることである。そのためのキー概念として本学会で言及されていたのが、マルクス主義、ポスト植民地主義、そしてポスト冷戦期のグローバリゼーションについての歴史的思考である。

世界文学の分析においてマルクス主義的分析は中心となる手法であり、本学会でも多くの発表者がこれを軸として発表を行った。Warwick大学の4人の研究者によるラウンドテーブルWorld Literature: Combined and Uneven Developmentは、世界文学が成立する基盤に注目する内容の発表であった。現在の文学的状況は、19世紀以降の西洋文学の覇権の状態からは脱したように一見は思われる。しかし実際には世界文学は「結合した不均衡な発展 (Combined and Uneven Development) の上にこそ成立している。現在世界文学を成立されているのは、世界各地域において産出される文学およびそれを取り巻く状況の質的等価性ではなく、むしろその不均衡さであるというのが彼らの基本的な見方である。この不均衡な状態は、近代の生んだ政治的経済的不平等のから直接派生したものであり、その意味において世界文学の現状は近代のプロジェクトの延長線上にあるものであると彼らは考える。発表者の一人Graeme Macdonald氏は、現在の「資本主義世界システム」が近代ヨーロッパの生んだ体制であることを確認しつつも、ヨーロッパを単一で均質なものとみなすことに異議を唱え、むしろヨーロッパをより小さな単位からなる複合体と捉えなおし、それを資本主義世界システムへの抵抗に繋げるべきであると主張する。また、Nick Lawrence氏は、世界文学の主要な論客であるフランコ・モレッティとパスカル・カザノヴァを参照し、世界文学の成立に経済／文化資本の不均質さが不可欠であることを述べた上で、それがRoberto Bolañoの小説2666にどう反映されているかを論じた。また、Pablo Mukherjee氏は、アフリカに出現している大都市、いわゆる「アフロポリス」に注目し、グローバリゼーションが根本的な蓄積の不均等さによるものであることを論じた上で、資本として扱われる文学と西洋の普遍化という危険について論じた。これらの発表においては、近代において形成された資本主義を中心とする社会システムがいかに現在の世界文学を決定しているかが論じられ、近代及びヨーロッパ中心主義が一見見えないところで現在も進行していることが指摘された。これらの主張に対しフロアからは、それでは彼らは「近代」という非常に広い範囲を指し示し未だ曖昧な概念をどういう意味において捉えているのかについて問う質問が挙がった。世界文学の理論化においては、現在から逆照射する形で近代を再考することが要求されるのである。

マルクス主義と並んで重要となるのが、ポストコロニアルな状況についての考察である。世界文学の活況がポストコロニアルな世界において実現したのは事実である。しかしポスト＝植民地とは、植民地主義が完全に断ち切られたのではなく、それがより不可視で根深いところで存在し続けている状況である。それは当然現在の世界文学の状況とも深く関係している。基調講演を行ったBenita Parry氏は、グローバリゼーションをポストコロニアリズムとポストマルクス主義の立場から論じた。彼女の関心は、グローバリゼーションのもとに支配を強めるヘゲモニックな世界秩序に対し新しい抵抗の政治は可能かということにある。フレドリック・ジェイムソンを参照しつつ、彼の思考にある楽観的な傾向を危険視し、より根本的な認識論的マッピングの調整が必要であることを主張した。Ben Etherington氏によるRethinking Materialism and Postcolonial Literary Studiesもまた、ポストコロニアリズムとマルクス主義を関連させながら世界文学の内実を考察する試みである。世界文学における「唯物主義的ポストコロニアル的遠近法」はどのように構成されるかが氏の発表の主題である。彼の発表は、テオドール・アドルノにならって、「物質」にかかずらうのではなく、「真実内容」に注目し、

それにより「現在のグローバルな社会・経済秩序に潜む構造的矛盾」を解明することを目指すものであった。

グローバル化について、それが冷戦以降の世界秩序であることに留意し、そこにおける資本主義の覇権と共産主義のその後について考察する発表もあった。Neil Lazarus 氏の発表 *Spectres Haunting: Postcommunism and Postcolonialism* は、冷戦以降の世界秩序について再考を行うものであった。ソビエト連邦崩壊以降、共産主義は完全に無効になったのだろうか。ポストコロニアリズムの世界においてかつてのヨーロッパ中心主義が形を変えて生き残っているように、氏は現在の世界において共産主義の残滓もまた存在することに着目する。また、Nicholas Brown 氏の *The Identity of Identity and Difference: Modernism and African Literature* は、ヘーゲルの弁証法的思考がマルクスを経て冷戦期まで受け継がれてきたことに注意を払いつつ、ポスト冷戦期のポストモダンの世界を比較する。またユートピアは提示可能かという問題について、政治的主体が不在となっている現代においてむしろ詩的なものに政治的可能性を見出そうと試みるものであった。

2.2 各地域の文学および批評実践

以上のような理論的側面に重点を置いた発表の他に、世界各地域で生産されるテキストとその受容についての個別の分析の発表があった。ここではその対象となるテキストの多様性が目立ったのと同時に、その受容が必然的に資本主義に支配された世界市場においてなされていることが確認された。

発表の中で最も盛んに扱われたのはアフリカ出身の作家によるテキストである。現在アフリカ各国の文学は、特にヨーロッパの読者に広く受け入れられ、それに伴って文学研究においても盛んに取り上げられている。一方で、この隆盛の背後にある支配的システムに対する批判と分析も活発に行われている。Ranka Primorac 氏はザンビアにおける文学の状況について発表を行った。1980年代の経済危機によりザンビアの文学の発展は停滞を迎えたが、しかし結果的にはこの停滞により英語圏文学に取り込まれることを免れ、若い作家を中心にザンビア独自の文学が形成されたという。Madhu Krishnan 氏の発表では、Chris Abani の *Graceland* と Chimamanda Ngozi Adichie の *Half of a Yellow Sun* という二つのテキストが取り上げられた。これらの作品は西洋メディアにおいて高く評価されると同時に、国内からは西洋の読者層に対して書かれた作品であるという批判も受けた。しかしまた、これらのテキストにはナイジェリアの土着の文化も色濃く反映されている。氏はこのテキストを、フランツ・ファノンの言う「伝統的理想主義とも西洋帝国主義とも異なる第三の、自由主義的国家文化」を予期するものとみなす。また Anna Bernard 氏は、エドワード・サイードをはじめとするパレスチナ知識人たちによる英語で書かれたメモワールについて論じた。これらのテキストはパレスチナの人々の生きた経験を大都市の読者に届ける役割を果たしたが、それは同時にパレスチナで起こった危機を普遍化するのではなく、それをグローバル化の一部として取り込まれるものとしてしまっている。しかしまた、この現象を市場化や悪しき読みの実践としてではなく、戦略的な書記のモードと解釈することも可能である。アフリカから西洋に向けて書かれたこれらのテキストについては、常に双方向の解釈が可能であり、そのどちらの効果も丹念に分析することが求められているということを感じた。

また、これら非西洋地域から出発し西洋において消費されるテキストを、市場の働きに焦点を当てて分析する発表も目立った。Kate Haines 氏もまた Adichie の *Half of a Yellow Sun* を取り上げ、このテキストがどのように市場に紹介され、どのような反応を引き起こし、そして主にインターネット上においてどのような新しい場を生じさせたかを紹介した。その上で、現代アフリカ文学の生産と受容を、市場を介した相互的な作用として分析した。Pavithra Narayan 氏はインドの出版事情について紹介した。Salman Rushdie のような国際的に顕著な活躍をする作家がいる一方で、あるいはまさにそのために、インド国内の出版社はトランスナショナルな巨大出版社に依存する形を脱出できていない現状が存在する。この状況を氏は「グローバルな資本構造に取り込まれた社会—経済的乖離」として批判的に分析する。また、Walter Göbel 氏は、18世紀から19世紀にかけて成立したイギリス小説に内在する西洋個人主義、帝国主義、資本主義の根本的な影響が、ポストコロニアルの現在西洋以外の地域において生産される小説の中にいまだ機能し続けていることを、Chinua Achebe の小説 *Things Fall Apart* の主人公 Okwonkwo の分析を通じて論じた。

また、アフリカ文学の流通を特に西洋における受容に焦点を当てて論じた発表もあった。Ruth Bush 氏は、英語で書かれたアフリカ系作家の小説がフランス語に訳されフランスで流通する過程を取り上げ、カザノヴァが著書「文学の世界共和国(邦題:世界文学空間—文学資本と文学革命)」で論じた「ポスト／コロニアル作家のパリでの『悲劇的』立場」の再考を試みた。また、Sarah Burnautzki 氏も同じくカザノヴァの論を参照しつつ、アフリカ文学のフランスにおける受容に際して働く社会的政治的な構造的拘束について論じた。

最後に、アフリカに限らず世界各地域の特定の文学をめぐる現象に関しての発表があった。それぞ

れの地域において固有の現象が出現しており、世界文学の名称のもとでそれらを単一の大きな言説に還元することなく分析することの必要性が求められることが感じられた。Kerstin Oloff 氏は 1970 年代世界に大きな印象を与えたラテンアメリカ文学について、特に「ブーム・ノベルの最後の一人」ともいわれる Carlos Fuentes の小説 *Terra Nostra* を取り上げ、このテキストを当時のメキシコの政治状況を包摂したメタ小説として読む。Yael Maurer 氏は Rushdie の描くボンベイを、「ローカルを超えたローカル」、「コスモポリタンな場」として再読する。また小林英里氏は、2007 年より河出書房から出版された池澤夏樹編集による世界文学全集を取り上げ、現在の日本における世界文学のあり方とその受容を紹介した。

3. 本調査から得られた結果と今後の研究課題

本学会のほとんどの発表に共通していたのが、世界文学とは各地域の文学テキストが、等価に扱われるのではなく、政治的経済的コンテクストを反映して不均質な形で生産され流通しているという認識である。Warwick 大学の研究者たちが示した「結合した不均衡な発展」という概念は、現在の世界文学を考える上で常に意識しておくべき概念であろう。同時にまた、この不均衡な世界における文学の流通は、決してヒエラルキカルに上流から下流へと一方的に進行しているのではない。現代においてもヨーロッパ中心主義は形を変えて根強く残っているし、言語においては英語の覇権的な状況がますます強固なものとなっている。しかし、アフリカやアジアなど非西洋地域からの文学が流通する際、それは、言語あるいは表象のレベルで覇権的権力による圧力が加えられているとはいえ、従来聞かれることのなかった声を伝える働きを伴う。このような新しい流通経路を戦略的に有効に活用していくことは、ヘゲモニックな世界システムに少しずつでも変化を与えることを意味する。「世界文学」が持つこうした多方向的な性格をどう活用していくかが、今後の文学研究者が考えるべき課題の一つであろう。

このように、政治的経済的要因に決定づけられたものとしての世界文学を捉えた上で、今後の日本の文学および文学研究においては、まず日本の政治的、経済的および歴史的立ち位置を認識し、それと関連させて世界の文学テキストを捉える事が必要となるだろう。ポストコロニアリズムの時代において、日本はほかのアフリカやアジアの諸国とは異なる立場にあるように思われるかもしれない。しかし、西洋の植民地主義を内面化しそれを積極的に実践したことからいえば、現在の日本も、そして日本における文学批評も、いまだ西洋中心主義の、そして植民地主義の影響下にある。レイ・チョウが中国および東アジアにおける文学研究について述べているように、今後の文学研究を行うに当たってはまず「文化帝国主義の遺産—その遺産を無視するのではなく—の内部における自己耽溺的な価値生産」(チョウ、23) という問題を検討することが必要となる。そうすることで、第一に世界の質的に不均質な文学的状况の中における日本の立場を同定することができるし、そこからほかの地域の文学に対する有効な読みを産出するための戦略を作り出すことができるのである。

今回の学会参加を通して、現在の世界文学の状況について、そして現在文学研究を行うに当たって必要な姿勢について考察する機会を得た。今後の博士論文執筆にあたり、自分の研究を行う立ち位置を明確にし、そこからこそ得られる考えを表わすことが必要であるということ再認識できた。また、今回参加したロンドン大学の School of Advanced Study では毎年様々な学会を開催しており、近いうちに発表者として参加したいと考えている。今後国際的に研究を発表していくことがあらゆる研究者にとって不可欠のこととなっていくが、その準備としても今回の学会参加は有意義なものであった。今回得た問題意識と世界文学という新しい枠組みの中でどのように研究を行うかという課題を、今後の研究の土台としていきたい。

参考文献

Chow, Ray. (1993) *Writing Diaspora: Tactics of Intervention in Contemporary Cultural Studies*, Oxford: Indiana UP. (本橋哲也(訳) 1998 『ディアスポラの知識人』 青土社)

まつうら めぐみ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

報告者がこれまで考え、了解していたディシプリンとしての「文学」についてのさまざまな考察や見解が、実際に多くの多様な研究者たちによって議論され、検証され、報告者がそれらを共有したという実感をもてたということがわかり、海外調査は有意義であったと考える。報告者が述べるように、

国民文学に対置する世界文学への接近の方法はしかし、やはりマルクス主義、ポスト植民地主義、そしてポスト冷戦期のグローバリゼーションについての歴史的思考を抜きには議論できないし、世界文学とは各地域の文学テキストが、等価に扱われるのではなく、政治的経済的コンテクストを反映して不均質な形で生産され流通しているという認識も的確である。報告者の学会の討論や発表に関する全体的な報告自体は、やや淡々と単調に中立的に紹介されている感があるが、その上で、最後に今後の日本の文学および文学研究に対する意見（まず日本の政治的、経済的および歴史的立ち位置を認識し、それと関連させて世界の文学テキストを捉える事が必要となるだろう。）を述べていることが印象に残った。というのも、しばしば海外（特に欧米）の学会で日本人研究者が感じる異文化とは、外国の研究者らの強固なポジショナリティ（立場性）の表明であると常々思うからであり、なによりも、それが実感として感じ取れたのがいちばんの収穫だったのではないだろうか。

（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科（文化学系）・戸谷陽子）